

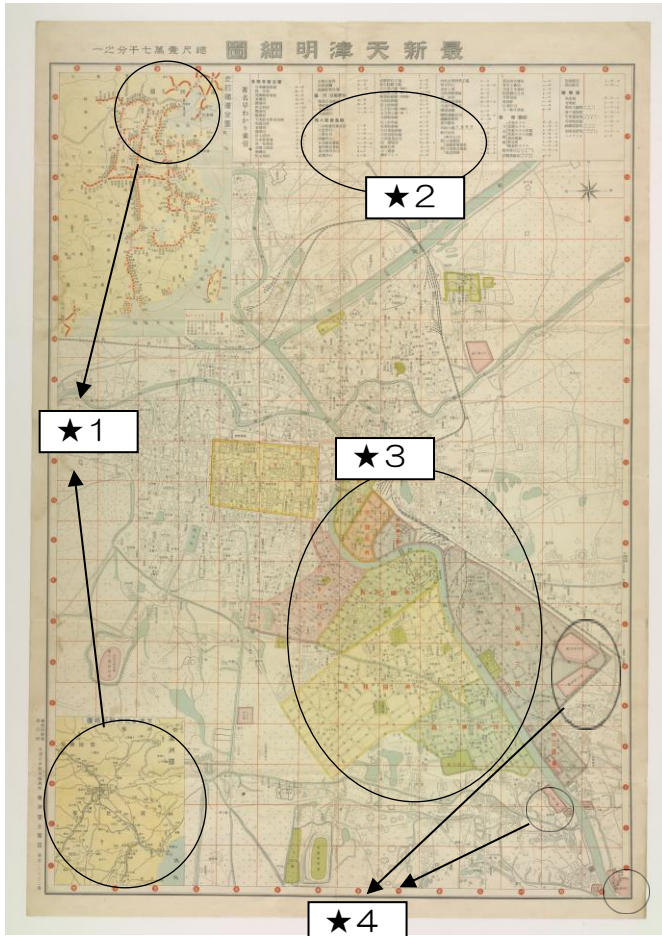
授業で使える当館所蔵地図

No. 62 『(外)最新天津明細図』

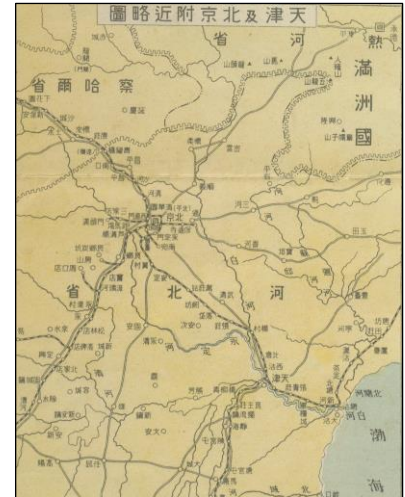
作成年：不明

サイズ：79×55cm

作者：東洋堂土産店（編・発行）



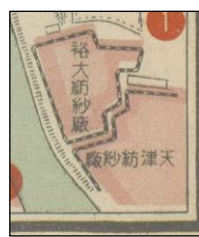
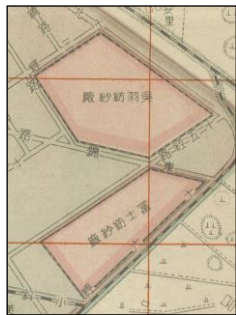
★1



★2

武商洋行工場 粉大製糖工場 公大第六廠(製粉) 公大第七廠(製糖) 裕魯紡紗廠(東洋紡) 天津紡紗廠 富士紡紗廠 公大第六廠(織造) 天津紡紗廠 富士紡紗廠 吳魯紡紗廠 大日本紡紗廠 南田田紡紗廠 天津電業公司 同 變電所 維新化學 大ニ商會 武商洋行	内外化學肥料工場 增幸洋行 清客工場 大阪商船會社 同 碼頭 近海郵船會社 大連汽船會社 國瑞運輸 國際運輸公司 滿鐵事務所 東亞醫院 百福大樓(日英商會) 秋田商會 興中公司 大連汽船會社 滿洲會社 華日商會 東光商會		
三井物產天津支店 大倉洋行 三菱公司 伊藤洋行 日本棉花會社 東洋棉花會社 東亞烟草公司 武商洋行	ト-8 ト-0 へ-3-ハ へ-8-ニ へ-0-ホ ト-8-ハ 9-7 ト-8	ロ-2 イ-1 ㄱ-3 ニ-14 イ-1 ロ-6 ㄱ-3 ニ-14 イ-1 ロ-6 ㄱ-6 ㄱ-5 ㄱ-5 ハ-5 ニ-5 イ-1 ハ-4 ハ-6	へ-8-チ へ-1 ㄱ-9 ㄱ-7 ㄱ-8-リ ニ-5 ㄱ-0 へ-8-エ ㄱ-10 ト-7 へ-0-ヤ へ-8 へ-8-ク へ-8-ク へ-8-ク へ-8-ク へ-8-ク

★4



★3



【解説】

清朝の弱体化と欧米諸国の中国進出の影響で、開港地となった天津の中心部を示した地図である。

天津は、隋の煬帝による大運河の開削を契機に交通の要衝として発展し、明の永楽帝の時代（15世紀初頭）には新たに首都となった北京への重要な門戸となった。

明清の時代（15～18世紀）、中国は海禁政策をとって自由な海上貿易は制限されていた。これに対し、産業革命以降、対中国貿易の拡大をはかるイギリスは、アヘン戦争を起こして開国を認めさせた。天津は、その後に起きたアロー戦争後に結ばれた北京条約（1860年）により開港地となり、列強が次々と租界を建設していった。地図中には、こうした租界が色付きで示されている。

租界は中国各地に建設され、特に上海などが知られているが、一地域に9カ国の租界が存在したのは天津だけであった。天津が諸外国にとって、戦略的・経済的に重要な場所であったことがうかがえる。

★1 天津の地理的位置

古くから交通の要衝であった天津は、首都が北京となった明の永楽帝の時代以降、首都北京の外港的な役割を担うようになり、様々な交通手段で結ばれていった。清末には諸外国との条約が次々と結ばれたが、このうち天津条約は17を数える。外交においても重要な場所であった。

現代においても、中華人民共和国政府の4大直轄都市の一つで、首都北京とは高速鉄道や高速自動車道路などで30分～2時間程度で結ばれており、華北地方における経済・貿易の中心地となっている。

★2 邦人経営商館

日本の経済進出の状況が示されており、今も存在している企業の名前も見受けられる。特に「紡紗廠（紡績工場）」の記載は多く、本図中の、特に川沿いに建設されていることが分かる（★4）。

★3 租界

天津には、9カ国（イギリス、フランス、ドイツ、日本、アメリカ、イタリア、ロシア、オーストリア＝ハンガリー帝国、ベルギー）が租界を作り、最大で同時に8カ国の租界が存在した。しかし、第一次世界大戦以降、租界の回収がすすみ、本図が作成された時点においては、専管租界は4カ国（英国（イギリス）、日本、佛國（フランス）、伊國（イタリア））となっていることがわかる。その多くは、湿地・沼地の広がる地域を埋立・整地しながら海河沿いに建設されたものであった。

地図中には他にも「基督教」「領事館」「兵營」などの単語や、「比国（フィリピン）」「德國（ドイツ※）」などの国名も読み取れ、国際的な社会が営まれていたことがうかがえる。

※中国ではドイツを德國、イタリアを意國と表記。日本の漢字表記（獨、伊）と混在している。

★4 在華紡

1902（明治35）年から、日本資本は中国での紡績経営に乗りだした。特に第1次大戦後の対中輸出の減少に対処するため、紡績各社が中国に進出し、巨額の事業投資と大商社との連携により中国の民族資本紡績を圧倒した。しかし、1925（大正14）年に上海の在華紡における労働争議から拡大した五・三〇運動など、反帝国主義運動の標的ともなった。

※なお、「公大第六廠（鐘紡）」との表記があることから、当該紡績工場が操業を開始した1936（昭和11）年以降に作成された地図であると推測される。

【用語について】

○大運河 …政治の中心地であった黄河流域と経済活動が活発であった長江流域を結ぶため、隋の煬帝、元のフビライ、明の永楽帝らによって、開削・拡張されてきた中国の交通・物流の大動脈の一つであった。北京から杭州までを結ぶ「京杭大運河」として、現在は世界遺産となっている。

○海禁 …明清の時代に行われた、民間人の海上交易を禁止する政策。その内容は、時期によっても厳しさの度合いは変化するが、原則として国家が対外貿易を管理する体制をとったものといえる。1757年、清の乾隆帝が対外貿易港を廣州一港に限定した。19世紀以降、自由貿易政策を推し進めるイギリスは貿易改善を要求したが認められなかったため、アヘン戦争を経て南京条約（1840年）により中国を開国させた。

○租界 …19世紀以降、中国の開港地に設けられた、外国が行政・裁判・警察権を行使できる、租借期間に期限がない地域のこと。その地域のなかでは、治外法権によって中国の主権は及ばなかった。このうち、1カ国によって専有されているものを「専管租界」という。

【利用の例】

○列強諸国の進出により半植民地化した中国の状況を知ることができる。

→年表を併用し、いつからどのような国が中国に進出していたかを確認し、その目的を考えさせる。

→中国の地図を併用し、開港地がどのようなところにあるか、租界がどのようなところにつくられたか考えさせる。

○日本の中国進出の状況を知ることができる。

→第一次大戦後の在華紡の拡大を確認でき、当時の日本の経済活動の状況について考えることができる。

→ワシントン体制下での日本の対中国政策に関して考察させる。

【参考文献・資料】

- ・天津地域史研究会編『天津史 再生する都市のトポロジー』株式会社東方書店（1999）
- ・渋沢社史データベース（<https://shashi.shibusawa.or.jp/index.php>）